
季節遅れの海

かさのきず

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

季節遅れの海

【Zコード】

Z6223F

【作者名】

かわのわざ

【あらすじ】

夏休み明けの始業式、主人公は海に行こうと誘われる。しかし、彼女は

「ねえ、今年は海に行つた?」

僕 上里裕一が、すぐ後ろの席の女子 坂本唯に、そう話しかけられたのは夏休み明けの月曜日、始業式も終わって担任が教室に来るまでの待ち時間でのことだった。

夏休み明けの質問としては、何一つおかしなところはない。

だから、普通に僕は「行つてなによ」「だけ答えて、彼女へと視線を移した。

すると、彼女はほんとうに嬉しそうにほほ笑んで言つたのだ。

「それじゃ、今度の日曜日に一緒に行こう」

「は?」

あまりに突飛な言葉に、僕は思わず訊き返す。

たしかに、海からあまり遠くない町ではあるため、海に行へことだけは簡単だ。

しかし、夏休みも終わつた今、行つて何をしようかといつたのだ。

「いいでしょ? どうせ日曜日は家で本を読み明かしているだけだし

……なぜそんなことを知つている?

「それに、まだ宿題終わつてないでしょ」

指摘するような坂本の声に、思わず「うう」「となる。

「私、ちゃんと終わつてるんだ」

つまり、私と一緒に海に行くなり、宿題を移させてやるといふことだらう。

だが、そんな取引に僕は……。

「行きます。行かせてください」

あっさり乗つていた。

いつもして僕は、宿題忘れの汚名を逃れる代わりに、季節はずれの

海へ行くことになった。

そして、日曜日の朝。僕は坂本との待ち合わせ場所である駅前の広場で、一人突っ立っていた。

時刻は十時三十分。約束のちょうど一時間前である。

なぜこんな時間になってしまったのか、自分でもよくわからない。ただ、家で待っていたら、いてもたってもいられなくなつて家を飛び出したのだった。

八月ほどではないとはいえ、まだまだ暑さは続いている。こうして突っ立っているだけでも、太陽の光は容赦なく降り注いでくる。

僕は思わずため息をついた。

「……なにしてんだら？」

思わずつぶやいた一言だった。

しかし、意外にも返事がすぐ近くから返ってきた。

「待ち合わせでしょ？ 私と」

声の狂うを振り返ると、こいつの間にか坂本がすぐ近くで立つっていた。

「おはよ！」

「お、おはよ！」

なんでここにいるんだ？ 待ち合わせの時間はまだまだ先だ。

「十時半……。時間に忠実なのはいいけど、ちょっと早すぎな

い？」

「お前じゃ。どうしたんだよ、約束は十一時半だらう

「や、それは……。どうでもいいじゃない。そんなこと」

この暑さのせいか、微妙に顔を赤くして坂本は言つと、僕の手をつかんで歩き始めた。

「ちょ、どうしたんだよ

自然と手をつないで歩くという体勢になり、僕は抗議の声を上げる。

「せっかく早く集まつたんだから、行くわよ」ところが、坂本は僕の言葉を聞く気はないようで、そのまま歩きだしていく。

結局、電車を降りるまで僕らは手をつないだまま、それによつやく気付いた坂本に、「何で言わないのよ」と殴られた。

電車から降りて十分。僕らはようやく海まで辿り着いた。夏休みには近場の海水浴場としてこぎわうこの砂浜も、それが過ぎた今としてはすっかり寂れている。

「うわあ、きれい」

しかし、坂本はそんな海を、あまりに真剣すぎる顔で見つめていた。

その横顔を見て、急に僕の心臓が高鳴る。

自分でも、なぜそんなことを思ったのか分からない。そんなこと全然ないのに、目を離してしまった途端、坂本が消えていなくなってしまった気がしたのだ。

「上里？」

見られていてことに気がついたのか、坂本が顔をこちらに向ける。

「どうしたの？ 私の顔に何かついてた？」

「いや、何でもないよ」

「そう。ならいいけど」

坂本は不思議そうに首をかしげるが、気にしないことに決めたらしい。砂浜に降りて、シートを敷き始めた。

「上里、手伝つて」

「あ、ああ」

僕も、砂浜に降りてシートの片方を持った。

「せーの」

一人で息を合わせ、シートを地面に下ろす。

その片端すつに、自分たちの持つてきた荷物を置いて、セット完

」。

シートの上に、坂本が靴を脱いで座る。

「ほり、上里もさつと上がって」

坂本に促され、僕も同じように靴を脱いで坂本の正面に座った。

「今日は、わざわざ付き合ってくれたか三郷のために、お弁当を作つたんだ。ちよつと早いけど先に食べちゃおひ」

「ああ、それで途中のコンビニで、僕が昼飯を買おうとしたのを止めたのか」

「うん。上里がコンビニで買つのはわかつてたし」

バッグから重箱を一つ。それと水筒とコップ一個を取り出して、

坂本は笑う。

重箱の中身は、ひとつめ食べやすいための配慮だらうが、おこぎり。

もう一つは卵焼きや、野菜炒めなど、割と簡単にできる料理が並んでいた。

「私、料理下手だから……」

どうやら、僕がじつと重箱を見ていたのを気づかれたらしい。坂

本は、照れたように頭をかいて言つた。

「まあ、でもよく出来てるんじゃないかな?」

「そう?」

「見た目はちゃんとできてるよ

「本当? ありがとう。ほり、早く食べてみてよ」

フォローがうまくいったのか、嬉しそうな坂本に促され、僕は卵焼きを一つつまんでみる。

「どう?..」

「うん。うまい」

「やつた!」

実際に、坂本が作つてきてくれたお弁当はなかなかおいしかった。そのおかげか、僕の箸はどんどん進んでいくて、重箱の中身はあつとこりう間になくなってしまった。

次に僕らは、スイカ割りをすることにした。

棒はそこら辺に落ちていたものを、スイカは、坂本が用意してくれていた。

まあ、バッグからスイカをとりだされた時は、さすがに驚いたけど。

「よーし、行くよ」

棒を片手に坂本が、十メートルほど離れたところで叫んだ。

坂本は田隠しをすると、棒を地面に立ててその場で十回転する。

「よし、こっちだ。坂本」

「りょーかい」

僕が誘導のために声をあげると、ふらふらになりながらも、坂本はゆっくりと歩いてきた。

「ちょっと右にずれてる。もうちょっとと左！」

「こっち？」

「そう。そっち」

そして、ようやくスイカの正面に立ち、坂本は大きく棒を振りかぶった。

そして、そのまま振りあるそつとして事件は起こった。

突然、強い風が僕らを襲い、坂本が大きく体勢を崩した。

ところが、振りあるそつとした勢いは消えなかつたらしく、棒はそのまま振り下ろされる。

その切つ先が向かつたのは僕の頭。

「ぐばつ！」

脳天に突き刺さるような痛み。

それを感じると同時に、僕の意識はブランクアウトした。

それは、夏休みの最後の一日。

終わらない宿題を、急いで仕上げようとしているときだった。
急にかかってきた電話に、僕は少しいらだちながらも、何の気なしに出て、ただ、呆然としていた。

「坂本さんがお亡くなりになりました」
なんだよ……それ。

「交通事故です」

嘘、だろう。

「×日に告別式をやりますので……」

それから先のことはよく覚えていない。

適当に何か言って、電話を切ったのだと思つ。

そして、いつの間にか夏休みが終わり、教室に入ったとき僕は再び呆然としました。

「おはよう。上里」

彼女が挨拶してきたのだ。まるで、何事もなかつたかのよつ。

「……おはよう」

本当はもつところいろ話をかたつた。でも、それを訊いてしまつたら本当に坂本はいなくなつてしまつ氣がして、僕は彼女に挨拶を返すことしかできなかつた。

「おい、何やつてんだよつ！」

その時、僕の肩を誰かが叩いた。

大して仲の良くないクラスメイト。たしか名前は鎌瀬とかいつたな。

僕がぼつぼつとそんなことを考えていると、そいつは胸ぐらをつかんできた。

そして、顔をくつつきそつなほど近付けて、怒鳴りつけてくる。

「坂本は死んだんだよ。それをちゃんと受け入れろ！」

ショックを受けているのはお前だけじゃないんだ

何を言つているんだ？ ちゃんとそこに坂本はいるじゃないか。

そう思つて、僕は坂本の席を振り返つた。

やつはり彼女はそこにいて、でも、悲しそうな顔を見せながら、口元に人差し指を一本立てていた。

「いいな。」とこいはとだいわつか。

卷之三

たが、僕はそのまま素直に謝るふりをした。

「俺も、どうやら結構動搖して

『始業式が始まります。全校生徒は、校庭へ集合してください』

どこかで
そんな旅送がなしてゐる気がした

「上野の...」

そのことに、僕は安堵する。

「あー、まだ起きあがつりや…………」

一
い
い
か
ら

坂本の静止の声を遮つて、僕は体を起こした。

また頭の痛みは少し弱っているがこの程度なら問題ないが至

坂本

「それよりも、彼女に伝えなければならぬことがある。
なに?」

心配そうにこちらを見つめてくる坂本。

そんな彼女に、本来なら伝える」とすらかなわなかつた思いを、ぼくは告げた。

「好きだ」

「え？」

驚いた顔。予想通りの驚き方をしてくれて、僕は少し嬉しくなる。

「いつまでも僕のそばにいてほしい」

しかし、すぐに坂本は困ったような笑いを浮かべた。

「無理だよ。気づいてるでしょ？ 私……幽霊だもん」

「知っているよ。そんなこと」

僕は、彼女の片腕を引っ張つて立たせると、その小さな体をしつかりと抱きしめた。

「それでも、こうやって触れられるじゃないか。」

坂本は、確かに存在している。ここにいるんだ

「あつ」

さらりに強く抱きしめると、彼女は小さく声を上げた。

「私も……」

そして、聞こえるか聞こえないかくらいの小さな声で、

「私も、好きだつ……え？」

急に、彼女の体が、僕の腕から抜けた。いや、吹き飛んだ。まるで、車にはねられたよう。

「坂本つ！」

僕はあわてて、砂浜に転がった坂本に駆け寄ると、彼女の体を抱き起した。

頭から血を流している。柔らかい砂浜では、こんな傷がつくとは思えない。

交通事故にあつたときの傷が、そのまま今の坂本に現れているんだ。

「坂本つー！」

「ごめん……ね」

今にも消えそなが細い声。

僕は全神経を耳に集中させ、その声を一言ももらすまことある。

「一緒に……いられな、くて」

「何言つてんだよ。無理を言つたのは俺だろつ。坂本が謝る必要な
んてないんだよ」

「最後に、こうして一緒に、いれて……よかつ、た

坂本は、急に体を起こした。

それが最後の力だったのか、坂本はまるで糸が切れたように砂浜

に倒れこんだ。

次の瞬間

坂本は、僕の前から姿を消した。

一年後、僕は再びこの砂浜に来ていた。

夏休みの間に来ようかとも思っていたが、やっぱり坂本と一緒に見ていた海が見たかったから、今度も季節遅れの海だ。

あれから一年。僕はいとも簡単に立ち直れた。

坂本がいなくなつても、世界は何ら変わりがないことに、無理矢理でも気づかされる。

僕は、砂浜にシートを広げ、その上に座った。
バッグから取り出したのは二つの弁当。

「お前のために作つたんだぞ。出ててくれよ

これは、僕の最後の悪あがき。

もし、今日のうちに坂本を見つけられなければ、来年はこの海に来るつもりはない。

しばらく待つても、坂本は現れず、僕はひとりでそのお弁当を食べた。

さて、次だ。

僕はバッグからスイカを取り出して、砂浜に置く。

「早く出てくれよ。これ、全部お前のためなんだから」

そう、一言つぶやいて、僕は目隠しをはめる。

そして、その場で十回ほどまわって棒を構えた。

……どちらに進めばいいのかもわからなかつた。

そりやそうだ。誰も導いてはくれないのだから。

「あの、何してるんですか？」

「そんな時だ。すぐ後ろで声がした。

「スイカ割りだ」

「……一人で？」

「本当は、もう一人いたんだけど、どこか行っちゃった」

「そう……ですか。

それじゃあ私が代わりにやりますね」

少女が砂浜の上を走っていく音が聞こえる。

それは、とある一点で止まり、大きな声で僕に呼びかける。

「こっちです！」

僕は、その声の方向に向かって、一歩ずつ慎重に足を進める。

「少し曲がりました。もう少し右です」

「こっちでいいのか？」

「はいっ！」

そして、ある程度進んだとき、彼女が「そこです」と言った。

僕は、そのまま棒を大きく振りかぶって、そして振り下ろした。

バコッ

手ごたえあり。

僕は目隠しを額にずらして、目の前を確認する。

見事に、スイカは割れて、その赤い実をさらしていた。

「やりましたねっ！」

「ああ」

少女の声に振り返った僕は、その少女の姿を見て、驚きのあまり手についていた棒を落としてしまった。

「なんで……」

「久し振り、裕一っ」

彼女は、目一杯の笑顔で笑った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6223f/>

季節遅れの海

2010年10月8日15時12分発行